

家庭学習応援教材

角田光代「トリップ」を読む

聖心女子大学 2012 過程の演習 新国語問題集アシスト【現代文編】

次の文章は、角田光代『トリップ』の一節に一部手を加えたものである。読んで、後の問に答えなさい。

ふたつの食堂の違いは、メニューの値段をあげればもともわかりやすい。四季のハンバーグセットは千八百円だった。地下食堂のカツ丼は四百二十円だった。あたしは二ヶ月ほど、ほとんどすべての食事をこの食堂ですませていたことがある。

朝のレストラン四季ならモーニングセットだった。フレンチトーストとかサンドイッチとかクロックムッシュとか、パンの種類は毎回違って、それにサラダとコーヒーがついた。地下食堂の朝は和食で、納豆六十円、海苔五十円、目玉焼き百二十円、ひじき八十円、味噌汁百五十円、なんていうそれを好き勝手に組み合わせさせてオリジナル朝食を作る。あたしの一日はそのどちらかの朝食からはじまった。

その二ヶ月間、あたしは食べもののことしか考えていなかった。朝食を食べ終えると、昼飯は何にしようかと考えていた。レストラン四季のメニューを頭のなかで広げて隅から隅まで思い描き、地下食堂のガラスのショーケースを思い浮かべて蠟細工のサンプルをひとつずつ眺め、十二時までの数時間、何を食べるかじっくりと決めた。昼食が終わるとおやつだ。レストラン四季にはアップルパイやチョコレートパフェがあり、地下食堂にはとろてんやソーダフロートがあった。それらを口に運びいれながらあたしは夕食のことを考えていた。生姜焼き。ハンバーグ。煮魚。選択肢は無限にあるように思えた。

しかし、おいしいと思えるものはひとつもなかった。何を食べても同じ味だった。二千三百円のフイレステーキも、六十円の納豆も同じ味がした。レストラン四季や地下食堂の名誉のために言えば、それらが違う場所であればあたしの感想もきつと異なっただけだ。たとえば大通りの一角とか、ファッションビルとか、繁華街の路地裏とかだったら、ハンバーグはハンバーグの味がしただろうし、ひじきはひじきの、カツ丼はカツ丼の、かぼちやのポタージュはかぼちやのポタージュの味がして、ひよっとしたら、おいしい、と思わず口にしていたかもしれない。

レストラン四季も地下食堂も病院のなかに存在している、ということが致命的だった。病院のなかはどこもかしこも同じにおいがした。入り口も、病室も、待合室も、トイレも廊下も診察室も、薬と病の混じりあったにおいだった。苦甘い、透明度のない、反省を促すようなにおいで、それは、レストラン四季も地下食堂も例外ではなかった。そのにおいは鼻に栓をするみたいにきつく充滿（きゅうみく）していて、嗅覚を狂わせ、舌をしびれさせた。

たったひとりで食事をしながらよく考えた。あたしが選ぶことのできるものなんてあるのだろうか。チョコレートパフェや、豚汁や、白身魚のパイ包みや、ハンバーグ茸ソースや、そんなあれこれを選んでつもりになっているけれど、そのどれもが同じ味しかないのだ。何ひとつ選んでいないことと変わりがいいのではないか。けれどやはり、朝食が終われば昼飯のことを、それが終わればおやつ

ことを考え、飽きずにメニューを思い浮かべるのだった。

高校はちやうど、大学受験のための自由登校になっていた。だから、あたしは毎日朝早く制服を着て、高校へ向かうバスと反対のバスに乗り、電車を乗り継いで病院にいった。そして真つ先にレストラン四季か地下食堂へ、朝食を食べるべく向かった。朝食後は七階のロビーで座ったまま眠るか、眠くないときは病院内をうろついた。レントゲン室へ続く、床にはられた緑のテープを踏んで歩いてみたり、電光掲示板が点滅している薬の受け渡し室に座っていたりした。

二ヶ月であたしは六キロ太った。七階の個室に入院していた父は、あたしが太ったぶんやせて、それから、あたしを追いかけるように太りはじめ(正確に言えばむくみはじめ)、追い越して太り続けていた。父の病室は、病院内において五十倍に煮詰めたようなにおいがした。何かが急速に腐りはじめ、何かはその腐敗を止めようとしている、その二つが強烈に混じりあつたにおいで、それは細かい雨みたいに、病室のなかのあたしの全身を浸す。死のおいだ、とあたしは思った。これが死のおいだと。そして朝食や夕食にどちらかの食堂にいつて、病院のにおいを嗅ぎながら味のしない食品を口にいれ、ゆつくりと咀嚼しながら、あたしは死を食べているのだと思った。死を食べて太り続けている。

病院のなかのどちらかの食堂で食事をしている自分を思い出すとき、不思議とその光景には音がなく、ひとけがない。食器のぶつかりあう音も、プラスチックの食器を洗う音も、人々の談笑も聞こえない。待合室のにぎわいも、レストラン四季のBGMも、なにも聞こえない。どんな音があふれていたのかまったく思い出せない。完璧な静けさのなかであたしはひとり食事をし、父はベッドで眠っている。

母親も大学生だった姉も、付き添ったり見舞いにきていたりしたのだから、だれもいなかったはずはないのに、あたしの思い出す光景のどこにも彼女たちはいない。看護婦もいない、午前中に歩きまわった外来棟や薬を受け渡すだっ広いフロアや、待合室やエレベーターにも人はいない。SFの近未来の町みたいに人の気配がない。

K大学病院にいるのは、食堂でただひとり黙々と食事をしているあたしと、ベッドの上に眠る、もの大ききの一・五倍くらいにむくんだ父親だけだ。そしてあのおい。病院のにおい。父の部屋の枕にもベッドカバーにも、レストラン四季のフォークにもグラスにも、地下食堂のプラスチックの湯飲みにもこびりついた、あそこできしか嗅ぐことのできない濃厚なおい。

現実とそうでないものの境界線があいまいなときに、この光景を思い出すと、そこにだれもいない、そのために、あたしはじつと待っているように思えてくる。父が死ぬのを、死が支配するのを、死を食べ続けながら、太り続けながら。そして光景はK大学病院を発端にするすると巻き戻され、音もひとけもないまま中学生だったり小学生だったりするあたしを映して、なんだか自分が、あの広い病院で父親の死を待つために生まれてきたような気がしはじめるのだ。何ひとつの可能性も選択権も持たず、ただだれかの死を待つために生まれ、成長してきたような。

問1 「あたし」が食べるさまざまな食べ物、本文中でどのように意味づけられているか。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

- ア 高価なものから安価なものまで、多様に提供された商品
- イ 単調な毎日にささやかな楽しみをもたらす、身近な商品
- ウ 限りある与えられた選択肢の中で、創意工夫する可能性
- エ 制約が多いように見えて、じつは無限にある人生の可能性
- オ 一見豊富にあるかのように見える、人生の選択肢と可能性

問2 「あたし」が太ることと、父がむくみのため太ることは、本文中でどのように意味づけられているか。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

- ア 食べ物を自由に選んで太った「あたし」と、死が近づいてむくんだ父は対照的な存在であり、このことが示すように、健康な人と病人の間には厳然たる差がある。
- イ 食べ物を自由に選んで太った「あたし」と、死が近づいてむくんだ父は対照的な存在であり、このことが示すように、人生の選択肢の多様さは人によって異なる。
- ウ 食べ物を自由に選んで太った「あたし」と、死が近づいてむくんだ父は相似形であり、このことが示すように、二人は強いきずなで結ばれた一心同体の親子である。
- エ 食べ物を自由に選んで太った「あたし」と、死が近づいてむくんだ父は相似形であり、このことが示すように人間は必ず死ぬ運命にあり、それ以外の選択肢はない。
- オ 食べ物を自由に選んで太った「あたし」と、死が近づいてむくんだ父は相似形であり、このことが示すように、どんな状況下の人間にも人生の選択肢は無限にある。

【解説】

◇本文の構成

前半（形式段落1～5）

ふたつの食堂

入院した父に付き添った二ヶ月間、あたしは食べものごとしか考えず、病院内のレストラン四季、地下食堂というふたつの食堂を利用し、ほとんどすべての食事をこの食堂ですませていた。メニューは豊富で、選択肢は無限にあるように思われた。しかしおいしいと思えるものはなく、何を食べても同じ味だった。病院にあるため、薬と病の混じりあつたにおいが充満し、嗅覚を狂わせ、舌をしびれさせたからだ。

後半（形式段落6～12）

病院で考えたこと

食事のときあれこれ選んだつもりになっているが実は何ひとつ選べていないのではないかと、思いながらも飽きずに食べるメニューを思い浮かべた。二ヶ月であたしは太り、父はやせ、それからむくみはじめた。父の病室は死のにおいにあふれ、あたしを浸す。食事のとき、あたしは死を食べていると思った。そのときの自分を思い出すと、そこには音がなく、ひとけがない。音もひとけもないなかで死のにおいにつつまれる父とあたし。父は死を待ち、あたしも何ひとつの可能性も選択権も持たず、ただだれかの死を待ち続けていた。

【解答】

問1 オ

ア 3段落で食事の選択肢は無限にあるように思えたが、実際には病院の死のにおいのために同じ味。しかしないのである。したがって、「多様に提供された」が、表面上しかおさえていないので×。

イ 「ささやかな楽しみ」が×。

ウ 「限りある」が×。3段落末「選択肢は無限にあるように思えた」と矛盾する。

エ 「無限にある人生の可能性」が×。12段落末にあるように「あの広い病院で父親の死を待つためだけに生まれてきたような気がしはじめる」という表現と矛盾する。

豊富さが表面的なものに過ぎないことを指摘したオが○。

問2 エ

『あたし』が太ること」は8段落末にあるように「死を食べて太」ることであり、12段落にあるように太り続けながら「死が支配するのを」待ち続けることである。父が太るのは死に近づくことである。ア、イは「対照的な存在」というのが×。ウは「一心同体」が言い過ぎ。死に支配されるという意味では相似だが、その時期には差があり一心同体とはいえない。オは問1でおさえたように「人生の選択肢は無限」ではないので×。必ず死ぬ運命という、人間の根源において相似形であることを指摘したエが○。